

① 昭和30年1月6日付

谷口直枝子宛吉田茂書簡

【釈文】

賀正

新年早速賀状

頂戴仕奉謝候、久

方振之のどかな新

年二気をよくし平

生の疎懶一層加

ハリ何方へも御不沙

汰御ゆるし可被下候、

幸二元氣ニ有之、幸ニ

御安心玉るへく候、

其内御帰東と存候、

書外譲拝晤候

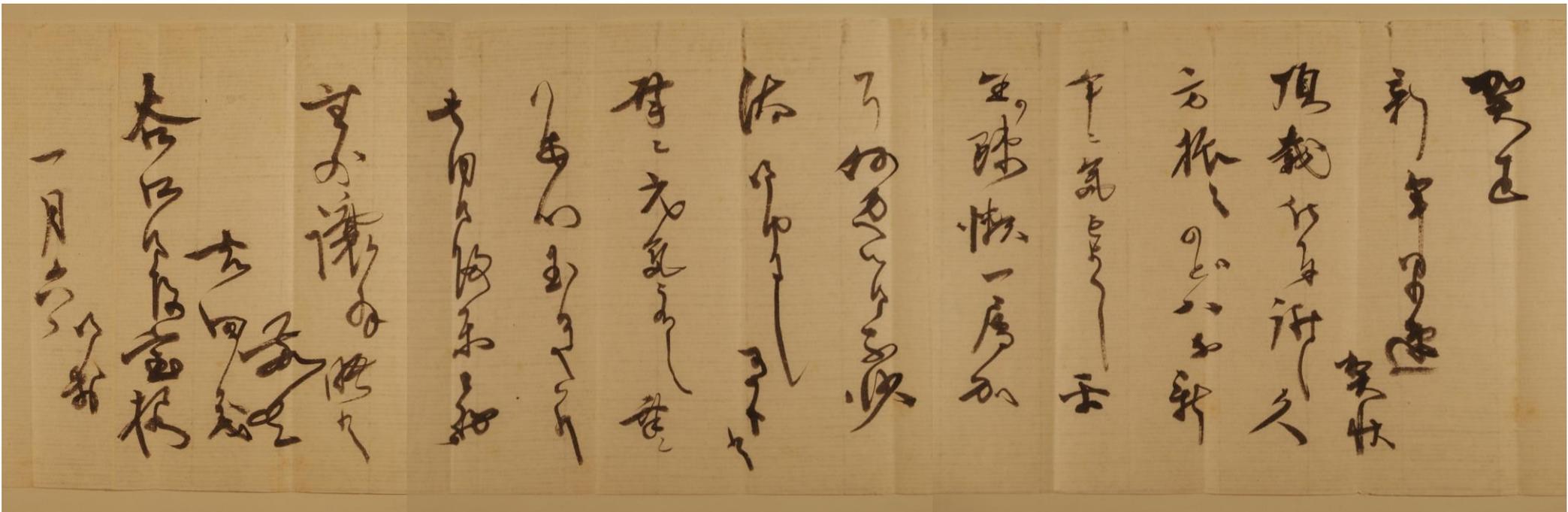
敬具

吉田 茂

谷口御後室様

御前

一月六日



【書き下し文】

賀正、新年早速賀状頂戴奉謝  
仕り候、久方振りののどか  
な新年に気をよくし、平生の  
疎懶一層加わり、何方へも御  
不沙汰御ゆるし下さるべく候、  
幸いに元気に之れ有り、幸い  
に御安心玉るべく候、其の内  
御帰東と存じ候、書外拝晤に  
譲り候 敬具

吉田 茂

谷口御後室様

御前

一月六日

【現代語訳】

賀正、新年に早速年賀状を頂戴し感  
謝申し上げます。久方振りののどか  
な新年に気をよくし、日ごろの無精  
が一層加わり、どちらへもご無沙汰  
しておりお許しください。幸いに元  
気にしております。幸いにご安心い  
ただきますよう。その内東京へ帰ら  
れることと存じます。書面以外のこ  
とはお会いした時に譲ります。敬具

吉田 茂

谷口御後室様

御前

一月六日

② 昭和30年1月17日付 谷口直枝子宛吉田茂書簡

【釈文】

拝啓、寒漸く

きひしく相成、

御さわりも無之

被為入候哉奉伺候、

昨日不斗も

鈴木孝子夫人

関宿より御来

訪被下（故大将の

肖像画御見

せ被下候為）、折

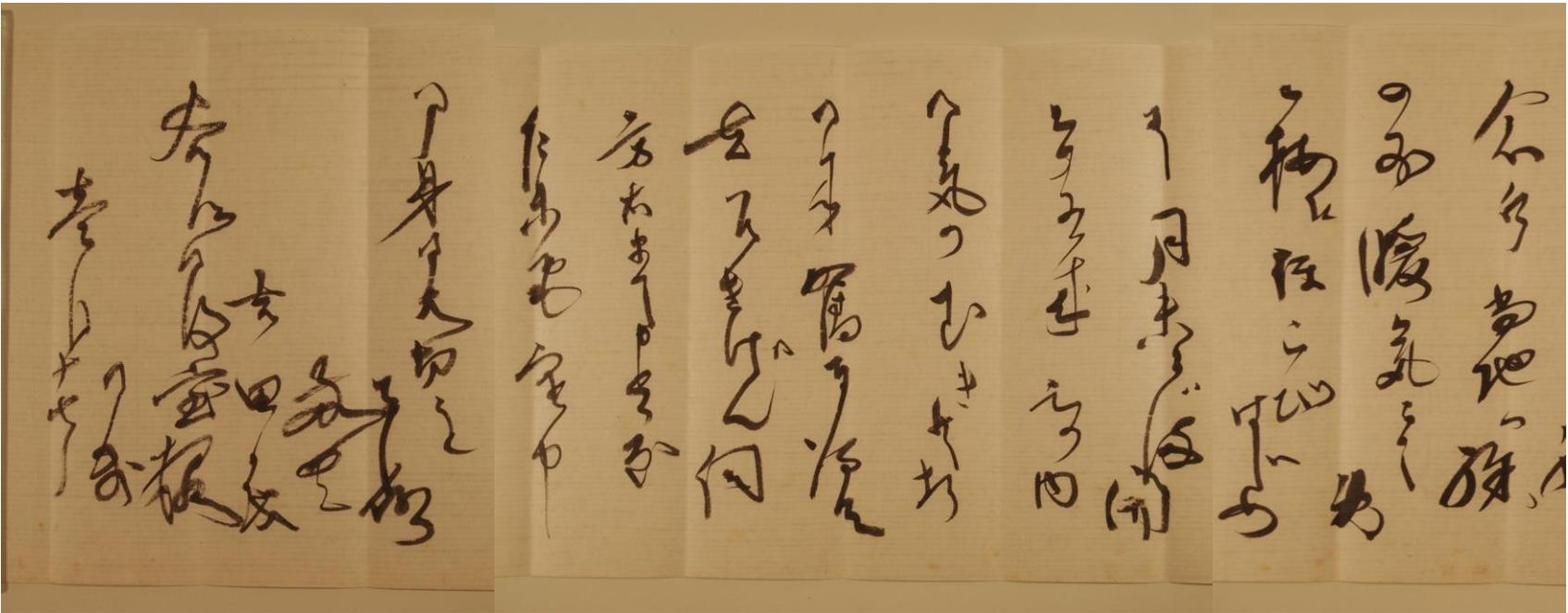
角御出二付あなた様

ニも御出を願候

得者よろしかりしと

申候処、既ニ御帰

東と承知致残



念仕候、当地ハ殊

の外暖氣ニテ既

ニ梅もほこびはじめ

候、月末ニハ満開

と可相成、その内

御氣のむき候折

御来駕奉待候、

先ハ御きげん伺

旁右まで申上度、

乍末筆寒中

御身御大切ニと

奉存候

敬具

吉田 茂

谷口御後室様

御前

壹月十七日

【書き下し文】

拝啓、寒さ漸ようやくきびしく相成り、あいな  
御さわりも之れ無こく入らせられ  
候哉、伺そうつらやい奉り候、昨日斗たてまつずも  
鈴木孝子夫人関宿より御来訪下  
され（故大将の肖像画御見せ下  
され候為）、折角御出でに付き  
あなた様にも御出でを願はい候え  
ばよろしかりしと申し候処、既  
に御帰東と承知致し残念仕り候、  
当地は殊の外暖気にて既に梅も  
ほころびはじめ候、月末には満  
開と相成るべく、その内御気の  
むき候折御来駕待ち奉り候、先ま  
ずは御きげん伺かたがたい旁右まで申し  
上げたながく、末筆乍ら寒中御身御  
大切にと存じ奉り候、敬具

吉田 茂

谷口御後室様

御前

壹月十七日

【現代語訳】

拝啓、寒さが次第に厳しくなってきましたが、お障りもなくお過ごしかと存じます。昨日思いがけず鈴木孝子夫人が関宿よりご来訪下さり（故〔鈴木貫太郎〕大将の肖像画をお見せくださったため）、折角のお出ですのであなた様にもお出でを願えたらよいと思いましたが、すでに東京にお帰りと知り残念です。当地は殊の外暖かく、すでに梅もほころびはじめました。月末には満開となるでしょう。そのうちお気の向いた時のご訪問をお待ちしております。まずはご機嫌伺いかたがた右まで申し上げたく、末筆ながら寒中お身体をお大事になさってください。敬具

吉田 茂

谷口御後室様

御前

一月十七日

## 【動詞について】

最終回は吉田茂の書簡に頻出する古文書特有の基本動詞や動詞を、今までの回でご紹介した候文の定型文や返読文字なども含め、改めてご紹介します。

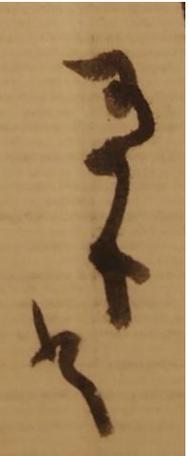
仕



…①3行目

「仕(つかまつる)」「は」「する」「行う」など動詞の謙讓語です。「仕候(つかまつりそうろう)」で、「いたします」「申し上げます」などの意味となります。

下



…①8行目 可被下候(くださるべくそうろう)

「下(くだす)」「は」「してください」と補助動詞で使われる場合が多い動詞です。補助動詞として使用される場合、受身・尊敬・可能を表す助動詞「被(る・らる)」とセットで「被下(くだされ)」「被下候(くだされそうろう)」、またさらに命令、許可・是認、推量、義務の意を表す助動詞「可(べし)」が付いて、「可被下(くださるべく)」「可被下候(くださるべくそうろう)」という形で登場したりもします。

有



…①9行目 有之



…②9行目 無之

「有(あり)」「は」「…がある」「存在する」の意味で、下に「之」が付いて、「有之(これあり)」と書かれる場合がほとんどで、吉田の場合もかなり崩した形で書いています。

「有」の対義語となるのが「無之(これなし、これなく)」です。

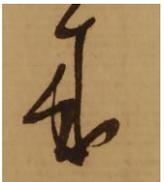
存



…①11行目 存候(ぞんじそうろう)

「存(ぞんず)」「は」「思う」「考える」の謙讓語です。「存候」で「思います」の意味となります。ほかに、「奉存候(ぞんじたまつりそうろう)」は頻出の語句です。

成



…②2行目

「成（なす・なる）」は「行う」「できあがる」などの意味の動詞です。吉田の書簡では、「相成（あいなり）」と文章を整える接頭語「相（あい）」とセットになっている場合が多い単語です。なお、「成」のくずし字は「来」のくずし字と非常によく似ており、注意が必要です。

来



…②7行目

《その他頻出の動詞》

願



…②12行目

申



…②14行目

致



…②15行目

## 【内容解説】

### ①昭和30年1月6日付書簡

「賀正」から始まるこの手紙は、吉田から谷口夫人にあてた新年の挨拶状です。前年の年末に第5次吉田内閣が総辞職し、首相を退いた吉田は、「久方振之のどかな新年二氣をよくし」とあるように、それまでの多忙な日々から一転し、落ち着いた新年を迎えたようです。「其内御帰東と存候」とありますが、宛先に書かれた谷口夫人の住所が兵庫県神戸市となっており、さらに②の書簡では、東京都目黒区に住所が移っていることから、ちょうど関西から東京に戻ってくるタイミングだったようです。

### ②昭和30年1月17日付書簡

①と同じ月に出された手紙です。新年早々、吉田茂のもとに来客があったことが手紙からわかります。「昨日不斗も鈴木孝子夫人閑宿より御来訪被下」とありますが、この「鈴木孝子夫人」とは、終戦時に首相を務めた鈴木貫太郎の妻です。終戦後鈴木貫太郎は、自身の故郷であった千葉県の実宿（せきやど、現在の千葉県野田市）に疎開し、昭和23年に没するまでこの地で暮らしました。

鈴木貫太郎と吉田茂は、敗戦と復興の首相という対照的なポジションにあった二人ですが、鈴木が昭和初期に昭和天皇の侍従長を務めた関係で、同じく宮中の要職である宮内大臣・内大臣を歴任した吉田の岳父・牧野伸顕を介して吉田ともつながりがありました。吉田は終戦直後の東久邇宮内閣で外務大臣に任命されたおりに閑宿の鈴木のもとを訪れています。この時鈴木は、「戦争は勝ちつぶりもよくなってはいけませんが、負けつぶりもよくないといけない。鯉はまな板の上に載せられてからは、庖丁（ほうちよう）をあてられてもびくともしない。あの調子で負けつぶりをよくやってもらいたい」と語ったそうです。吉田はこの鈴木の手紙をGHQとの交渉の原則とし、「言うべきことは言うが、心から協力する気持ちを持つ」ことにしたと述べています。

手紙では、鈴木夫人は「故大将の肖像画御見せ被下候為」、すなわち鈴木貫太郎の肖像画を吉田に見せるためにやってきたと書かれています。吉田の首相としての心構えを説いた鈴木貫太郎の夫人が、吉田の首相退任直後に大磯を訪れたのは、大任を終えた吉田をねぎらう意味もあったのかもしれませんが。

※参考文献 吉田茂『日本を決定した百年』日本経済新聞社、1967年